

# 西別府廃寺跡・西別府祭祀遺跡及び幡羅遺跡 (埼玉県熊谷市)

2013.4.9 更新







西別府廃寺・幡羅遺跡・西別府祭祀遺跡位置図 深谷市教育委員会写真提供

## にしべっふ 西別府廃寺 飛鳥～平安時代 埼玉県熊谷市所在

西別府廃寺は櫛引台地上の北縁、標高約33mの台地上にあり、西側に幡羅遺跡、北側に西別府祭祀遺跡が立地する。

幡羅遺跡は幡羅郡の郡家跡であり、隣接して建立された西別府廃寺は郡司層の氏寺とされる。

瓦の変遷から、8世紀初頭に創建され、9世紀後半まで存続していたことが明らかとなった。創建年代は幡羅遺跡が整備された時期に近く、郡家の整備に伴い寺院が造営されたと考えられる。遺構としては、溝・基壇・瓦溜り状遺構などが確認されている。

<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/eventtheme/nishibeppu090627.pdf#search='西別府廃寺'>

湯殿神社



遠方は幡羅遺跡方向



正面が湯殿神社



西別府祭祀遺跡の史跡表示





7世紀後半から10世紀代までという長期間にわたり、継続して水辺で祭祀が行なわれていた



人形・馬形・剣形・有線円板形・有孔円板形などが出土した









正倉院北方向



実務官衛域及び正倉院北方向



実務官衛域及び正倉院南方向



実務官衛域及び正倉院南拡張範囲方向



湯殿神社裏の湿地と西別府祭祀遺跡(右手)



この地域は別府沼公園があったりと湿地が多い

湯殿神社裏の西別府祭祀遺跡周辺



正面方向が西別府廃寺跡



この辺りが西別府廃寺跡



道路を挟んで左手が西別府廃寺跡、右手が西方遺跡



この辺りが西方遺跡



正倉院北辺りの森吉古墳方向



これが森吉古墳



墳頂に祠がある(中央)

正倉院北方向



湯殿神社・西別府廃寺跡方向



正倉院南・実務官衛域方向



道路遺跡方向



実務官衛域方向



全久院



山門



本堂(木造)





# 深谷七福神・七草寺霊場会のご案内

## 1 瑠璃光寺 「大黒天・ハギの寺」

【大黒天】  
字家上流。出世成功、生活の繁栄を願う縁起の神。  
【ハギ】  
字家跡ハギ屋敷の瑠璃光寺。花の色は一般的に紅紫色。(白花もある)。開花は7月～9月にかけて。  
深谷七福神の霊場。



## 2 一乗寺 「布袋尊・ナデシコの寺」

【布袋尊】  
子持良久。家内円満、福徳行運をたらす神。  
【ナデシコ】  
マナヅク科ナデシコ属の多年草。花は直径4～5cmの大きさで淡紅色。  
開花は8～9月にかけて。



## 3 宝泉寺 「福祿寿・キキョウの寺」

【福祿寿】  
円満、富強、長寿の神。  
【キキョウ】  
キキョウ科キキョウ属の多年草。自然の心づき舞臺だが、昔に因り、青・紫・黄・赤などもあり、花形や葉形の変わったものもある。  
開花は8～9月頃。



ここは

**全久院**  
TEL.0485-71-1284

**正伝院**  
TEL.0485-87-3127

**泉光寺**  
TEL.0485-72-2539

**惣持寺**  
TEL.0485-71-1284

**瑠璃光寺**  
TEL.0485-71-1945

**一乗寺**  
TEL.0485-71-4543

**宝泉寺**  
TEL.0485-72-3878

## 5 惣持寺 「弁財天・オバナの寺」

【弁財天】  
七福神唯一の女神。家内繁栄、豊饒無量。  
【オバナ(スズメ)】  
イネ科スズメ属の多年草。小穂は白く毛に包まれ、穂への軌は紅葉色。  
開花は8～9月にかけて。



## 6 泉光寺 「恵比寿天・オキエシロの寺」

【恵比寿天】  
家内繁栄、豊饒無量。人々に愛みとらるる神。  
【オキエシロ】  
オミナヅク科オミナヅク属の多年草。葉の先に葉刺のような葉色1/4小さな花をたくさん咲かせる。  
開花は8～10月。



## 7 正伝院 「毘沙門天・クズの寺」

【毘沙門天】  
仏法守護、興隆進歩、財宝守護神。  
【クズ】  
マメ科クズ属の蔓性の多年草。花は多数の鐘形花。黄赤・黒褐色としての色変もある。開花は8～10月。



左手が本堂、右手は庫裡



総反り(真反り)になっている







花頭窓と菱欄間















繰形の付いた大斗肘木



一軒の平行垂木



左手が本堂、右手は庫裡



庫裡の唐破風



東方館跡付近



右手前方に土塁があるのだが、木の本9号墳ともされている

この左手が東方館跡



右手木々の辺りも東方館跡に含まれる



最近の発掘調査現場方向(右手の車は今回の調査隊の所有車)



# 幡羅遺跡と西別府廃寺

知久 裕昭

## はじめに

幡羅遺跡は、深谷市に所在する、古代武蔵国幡羅郡の郡家（郡役所）跡である。中宿遺跡（深谷市）に次ぐ県内2例目の郡家跡として、また遺跡全体が良く残り、寺院跡や祭祀跡とのセット関係が分かる例として注目されている。

## 1. 幡羅郡家の造営

幡羅郡家は、律令国家の建設が進む7世紀後半に造営される。立地する台地縁辺は、それまで墓域であった場所で、集落は認められない。幡羅郡域の古墳には、所謂首長墓と呼べるようなものはみられないが、幡羅遺跡周辺の地は、後に郡領となる有力者の本拠地付近であったと思われる。

7世紀後半の郡家造営当初は、正倉院は形成されておらず、未確認ではあるが、郡庁も無かったものとみられる。官衛的建物は少なく、竪穴建物も混在する状況であるが、7世紀末になると郡家の再整備が行われ、本格的な官衛となる。交通網はそれまでにも存在していたであろうが大規模に整備され、正倉や恐らく郡庁も造営される。なお西別府廃寺は、それより若干遅れて8世紀初頭に創建されると考えられる。

## 2. 古墳群から寺院へ

古墳は、埋葬や追善供養のためだけではなく、地方支配のモニュメントとしての性格を持っていた。特に大型のものはそうした性格が強い。幡羅郡域で特に大規模な古墳が見当たらないことは、傑出した有力者の不在をも意味するかも知れない。

幡羅遺跡周辺から西へ約2.5kmにわたって台地縁辺に分布する木の本古墳群は、5世紀末から7世紀前半にかけて築造される。その後7世紀後半になり、突如築造が開始されるのが、幡羅遺跡から南東へ約1.8kmにある籠原裏古墳群である。直径10m前後の小規模な古墳が10基確認されており、郡家に近く、刀装具が出土することなどから、官人層が被葬者である可能性が考えられる。この古墳群は、8世紀初頭までのものとされるが、その築造が終了する8世紀初頭に、西別府廃寺が創建される。伽藍配置は不明であるが、瓦の

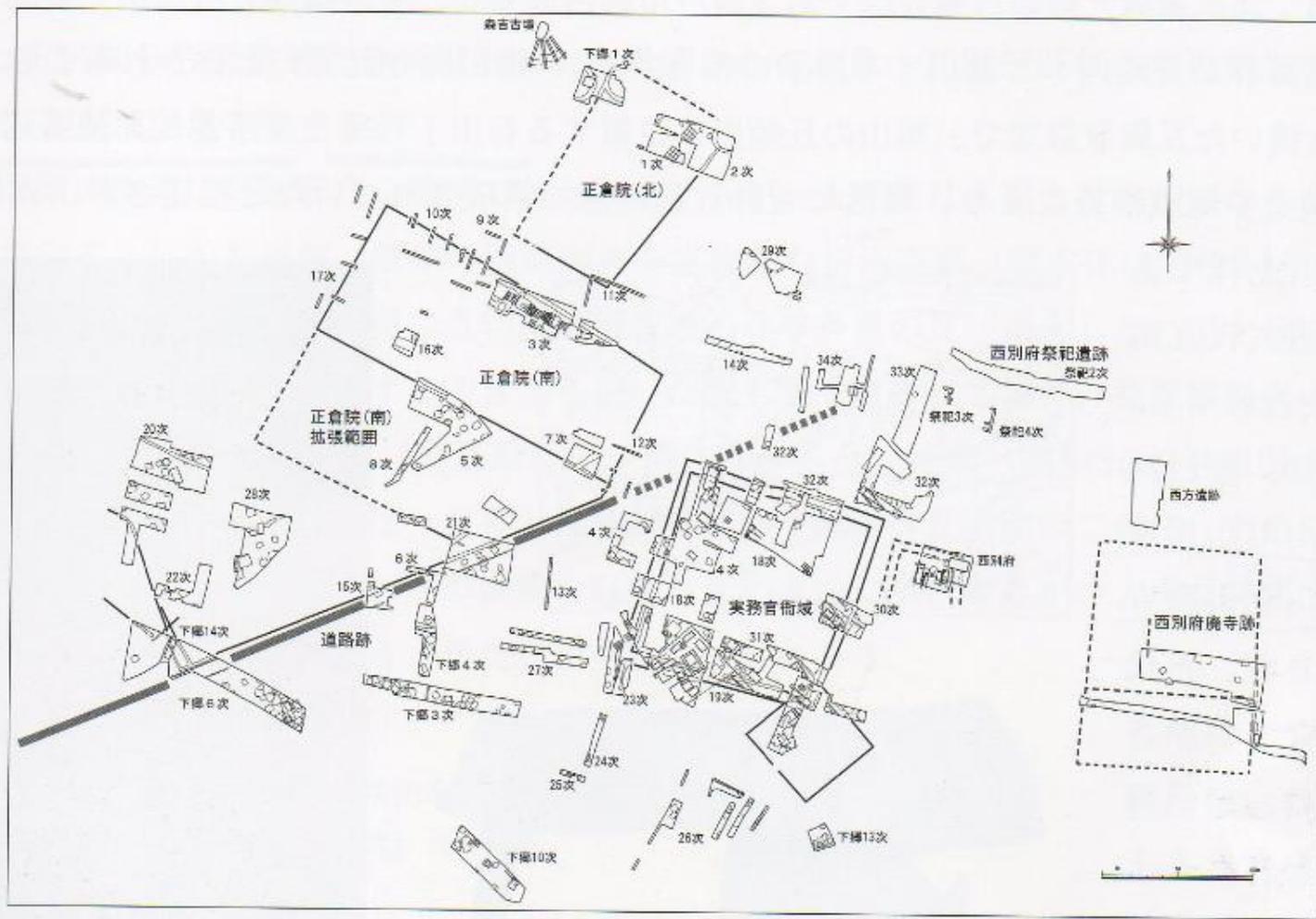


第1図 幡羅遺跡周辺の遺跡 (1/40000)

分布から一定の寺域を持つものであることは確実である。また、基壇も確認されている。それまで古墳が担っていた機能が、仏教の浸透と共に、寺院へと受け継がれていくことが読み取れる。

### 3. 幡羅郡家と西別府廃寺

郡家に隣接、或いは近接して寺院が造られる例は非常に多く、周辺寺院などと呼ばれる。その性格には、官寺、氏寺、公寺などといった説があるが、国分寺のような官寺とは異なり、郡領などの氏族によって造られたものが大多数とみられる。しかし、郡家と一体であるため、公的な機能も付随してくるという説が説得力がある。具体的には、祖先信仰や一族繁栄祈願といった氏寺的機能の他に、護国祈願や民衆教化といった公的な機能も担っていたものと思われる。隣接している祭祀遺跡も含めて、民衆を治めるために不可欠な精神的な部分を担う場所として、寺院は重要なものだったであろう。



第2図 幡羅遺跡全体図

#### 4. 幡羅郡家と西別府廃寺の衰退

幡羅郡家の実務官衙施設は、9世紀前半～中頃に構造に大きな変化が認められ、郡庁は存在しなくなる可能性がある。しかし、正倉は変化なく維持され、10世紀前葉に廃絶する。一方、実務官衙施設は構造や恐らく性格をも変えながら、11世紀前半まで維持される。

西別府廃寺は9世紀後半までは存続するが、その後、竪穴建物が寺域に進出してくる。その後も宗教活動が行われた可能性があるが、伽藍をもつ寺院としては、その頃に終わりを迎えるとみられ、郡家と終焉時期を異にする。このことは、創建した氏族の衰退などの要因も考えられるが、氏寺であっても公的機能を併せ持っていたと考えるなら、それだけの要因とするのは安易である。郡家周辺寺院の性格そのものについても触れる問題であり、今後の検討課題である。

#### おわりに

幡羅遺跡では、正倉や館、曹司、道路といった施設が多数確認され、郡家の全体像を浮かび上がらせてつつある。しかし、中枢施設と言うべき郡庁が確認されていないことが問題である。また、郡家に関する西別府廃寺、西別府祭祀遺跡については、寺の構造や祭祀の実態が明確でない。今後、郡家と関連付けて、更に調査、分析をしていく必要がある。

熊谷市立江南文化財センター テーマ展

元原現場から

文化力  
MUSEUM OF CULTURE

わが街熊谷遺跡めぐり

西別府遺跡群

西別府遺跡

## 1 はじめに

西別府遺跡は、熊谷市西部西別府地区・深谷市境に所在する遺跡です。西別府から深谷市にかけては、古代の幡羅郡の郡家（郡役所）があった場所で、西別府遺跡もこの幡羅郡家にかかわる遺構が確認されています。また、遺跡の周辺には、隣接して西別府祭祀遺跡と西別府廃寺という遺跡が所在し、幡羅郡家にかかわる重要な遺跡として注目されています。

今回展示の西別府遺跡は、深谷市幡羅遺跡から続く郡家にかかわる遺跡で、西別府廃寺と幡羅遺跡の中間を埋める位置にあり、郡家の政庁が存在する可能性があると注目されています。西別府祭祀遺跡は、西別府遺跡北側の台地縁辺部に位置し、7世紀中頃から11世紀に至るまで連綿と行われた水辺の祭祀の遺跡です。西別府廃寺は、8世紀初頭から9世紀後半まで存在した古代寺院で、郡家の郡寺の機能をもつ寺院として考えられています。

これら3つの遺跡が有機的に機能していた郡家は、全国でも岐阜県弥勒寺官衙遺跡群（美濃国武儀郡家）に次いで2例目の貴重なものです（第1図）。

第1図 西別府遺跡群位置図



## 2 西別府遺跡の調査

調査は、平成15年度に行った予備調査を経て、平成16・20・21年度（第1～3次調査）と実施しました。

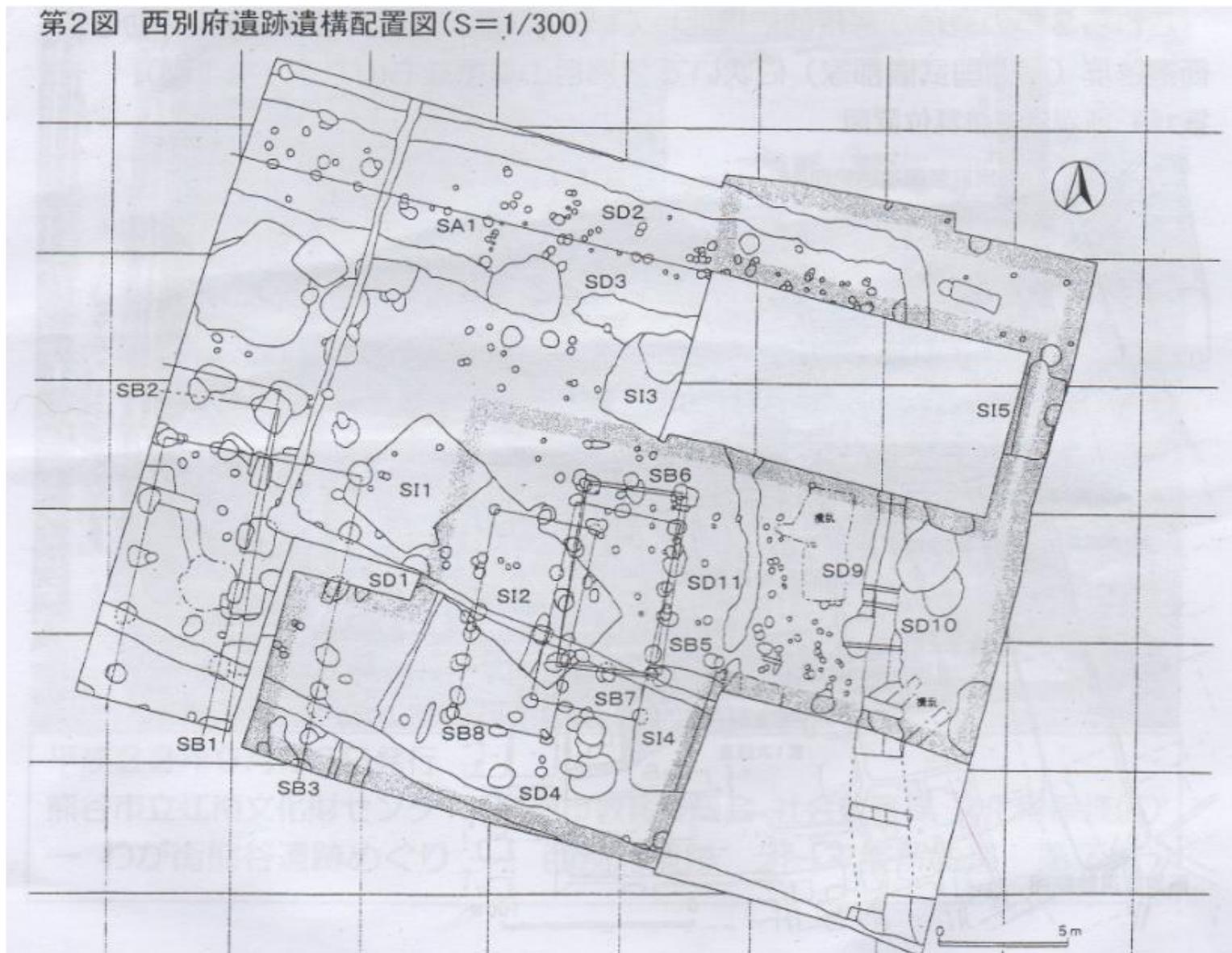
主な遺構としては、二重区画溝に囲まれた中に、大型と小型の掘立柱建物跡が確認され、この大小の掘立柱建物跡は少なくとも3期にわたる建替えを経て、9世紀後半から10世紀後半の約100年にわたって存在していたと考えられます。また、区画溝は、出土遺物から11世紀前半には廃絶されたと考えられ、この施設はこの時期には機能を失っていたと推定されます。

この二重の区画溝に囲まれた施設は、大型の掘立柱建物跡を中心に掘立柱建物跡が整然と並んでいることから、郡役所の機能の一部を担っていた重要な施設の北東隅であったと考えられます。

その他、竪穴建物跡、土坑、ピットが確認されていて、掘立柱建物跡と重複している竪穴建物跡は、掘立柱建物跡が建てられた前段階につくられたもので、二重区画施設が形成される前のこの地区の様子を推定できるものです（第2図）。

出土遺物は、土師器・須恵器・土師質土器、当時的高级食器である緑釉陶器や灰釉陶器などの土器のほか、隣接する西別府廃寺に使われた軒丸瓦・軒平瓦なども確認されています。

第2図 西別府遺跡遺構配置図(S=1/300)



### 3 掘立柱建物跡について

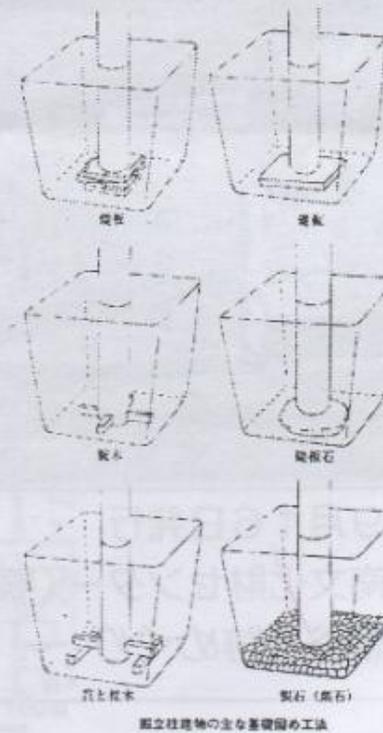
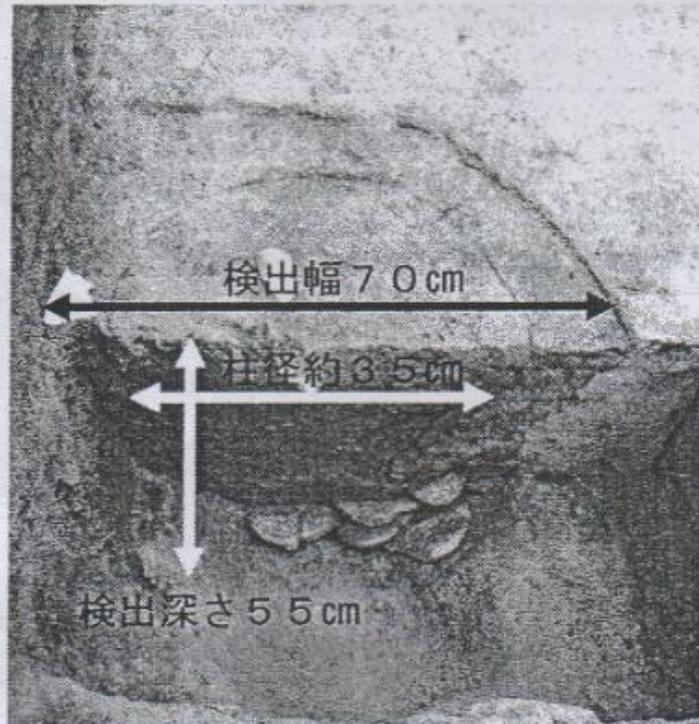
確認された掘立柱建物跡は、大型のものが3棟、小型のものが4棟ありました。大型の掘立柱建物跡は、SB1・SB2・SB3で、ほぼ同じ位置に時期を違えて建替えがなされています。順番は、SB2（9世紀後半）→SB1（9世紀末～10世紀初頭）→SB3（10世紀後半）で、SB3の規模が梁行3間×桁行5間以上の大きなものです。SB1及びSB2の規模は判然としませんが、同規模の可能性が考えられます。柱穴の規模は、SB2が最も大きく、一辺1m以上の方形でした。SB1も、SB2よりは小さいですが一辺1m前後×0.5m前後の規模でした。SB3については、直径1m前後の楕円形の柱穴で、その構造は、柱の沈下を防ぐため扁平な河原石や片岩を使用した礎盤（板）を据え置く工法（第3図）が採られるという工夫がされていました。

一方、小型の掘立柱建物跡（SB5・SB6・SB7・SB8）は、大型の掘立柱建物跡の東5m～12mの位置にあり、やはりいずれもほぼ同じ位置に建替えられる状況でした。その順番は、SB5とSB6がほぼ同じ位置で建替えられた後、SB7→SB8と建替えられたと考えられます。規模としては、SB8の梁行2間×桁行4間を除いて3棟はいずれも梁行2間×桁行3間ですが、いずれの面積も約32㎡となり、ほぼ同規模です。

大型と小型の掘立柱建物跡は、二重の区画溝内で同時期に機能していたと考えられ、出土遺物からSB5・SB6・SB7・SB8の時期は特定できませんが、

SB1・SB2・SB3の時期が出土遺物から分かっていますので、双方の建物の軸方向から推定すると、SB2とSB5・SB6が9世紀後半に、SB1とSB7が9世紀末～10世紀初頭に、SB3とSB8が10世紀後半に同時期に存在していたことが考えられます。

第3図 掘立柱建物跡(SB3)の柱穴



## 4 区画溝について

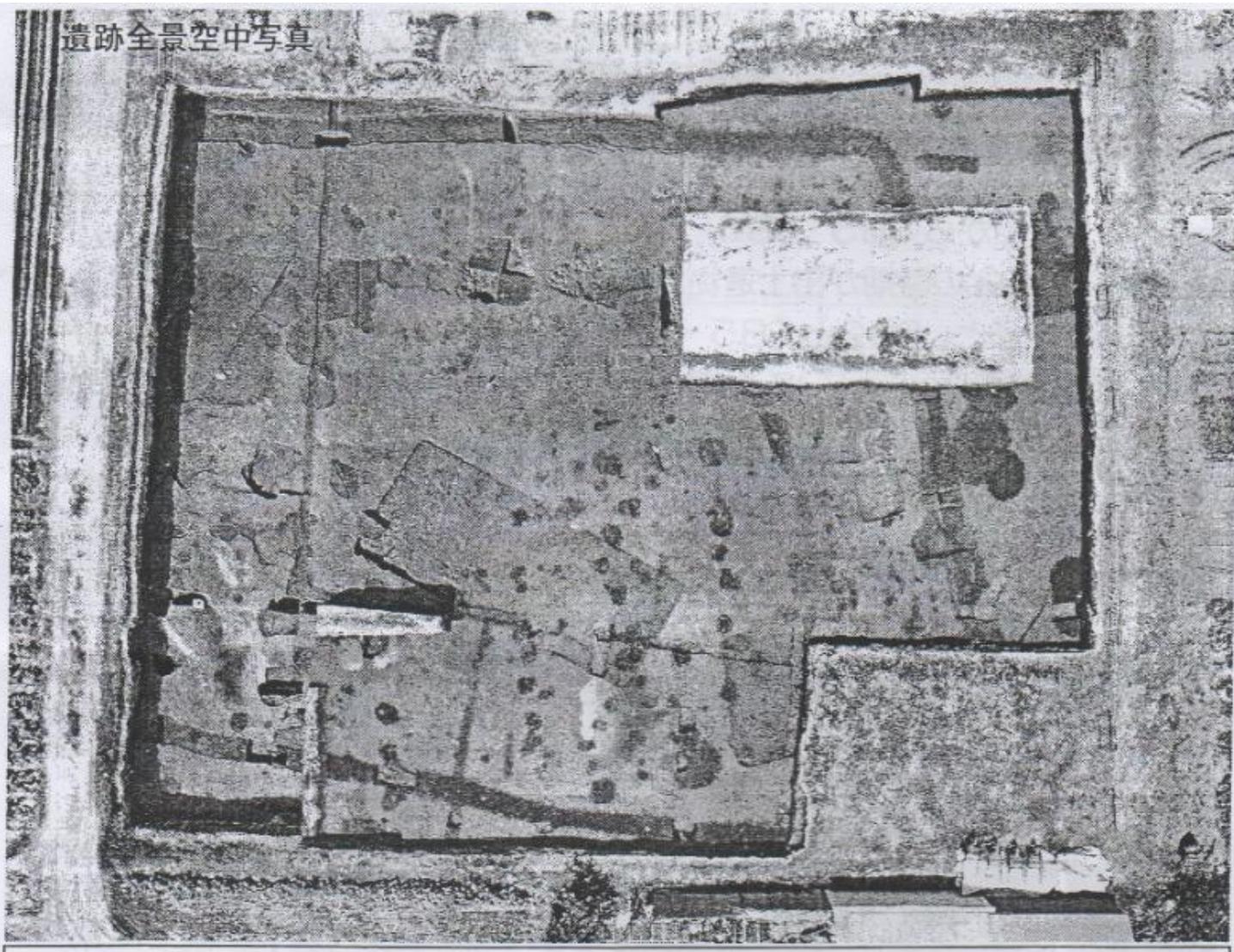
掘立柱建物跡が存在したこの施設は、二重の溝で区画されていました。外側の溝（SD2・SD10）は幅1～1.4m前後で断面形が逆台形のしっかりした溝でした。内側の溝（SD3・SD11）は、幅0.5～1.5mの断面形が崩れた船底状の掘りの浅いもので、平面も連続しない部分が見られました。

外側の溝は、南北方向に走る部分では掘り直し（SD9→SD10）が確認されました。

これら2条の区画溝間約4mの様子は詳細には分かりませんが、発見された掘立柱列や土層断面の観察から、おそらく掘立柱塀という形態から土塁という形態につくり替えられたことが考えられ、区画の施設として整備・充実していたことが推定され、重要な区画施設として営繕されていたようです。

区画溝は、掘立柱建物跡と同時期に機能していたと考えられ、出土遺物から11世紀前半代には機能を失い廃絶されたと考えられます。同時にこの施設全体も機能を失ったと考えられ、幡羅郡家の他の施設の盛衰とも一致します。

遺跡全景空中写真



平成22年9月16日発行

熊谷市立江南文化財センター(熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係)

— わが街熊谷遺跡めぐり — 西別府遺跡 テーマ展解説書 第7集